
家の居候はニートで魔法使い

東雲 秋葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家の居候は二ートで魔法使い

【著者名】

Z-1983-Y

【作者名】

東雲 秋葉

【あらすじ】

学校から帰つてきたらそこには悠々とせんべいを食べお茶を啜る魔法使いのような格好をした女の子がいた。なんでも向こうの世界で働くのが疲れたからこっちの世界に転移してきらしい。いや、意味わからないから。そんな理由で家に住まわせるとか言われても・・・平凡な男子高校生と異世界からやってきた魔法使いの女の子との生活が始まる。

一話・帰つてきたら居たのですが。

学校も終わり帰宅する。如月空志は自宅のドアのカギを開けドアを開き自宅に入る。

「ただいま。」

現在父親の海外出張に母親が付いて行ってしまったために両親ともに不在だが、どうも一度習慣となってしまったものはなかなか治るものではないし、特に治そうとも思わない。

しかし、今は帰つてくるはずのない挨拶に

「おかえり。」

と言う返事が返つてきた。どうやら居間からの声だ。

「おかしいな、戸締りは完璧なはずなのに・・・まさか泥棒か！でも普通泥棒が『おかえり』なんて言うか？」

そして全ては居間に行けば分かるといつ結論を出し、急いで居間へ行くことにした。

襖を勢いよく開ける開け

「人の家に勝手に入る不法侵入者は誰だ――――――！」

と叫ぶと

「あ、どうもお邪魔します。」

せんべいを咥えこっちを振り返る、まるで魔法使いの格好をした女の子がいた。

あまりのフレンドリーな返しに多少ずつこけはしたけど、取り敢えず話をしない事には何も始まらないな。

「こんこちは、いやもうそろそろ六時だし、こんばんはかな。僕の名前は如月空志。君の名前は？」

「私の、ボリッボリッ、名前は、ボリッボリッ、ズズーッ、ゴッ

クン、フェイメール・アンジエーラ・マスコットティアです。フェルと呼んで下さい。」

「おい、自己紹介の最中にせんべい食つて、お茶を啜る奴が何処にいる?」

「ほり、この丸く、平たく、固く、食べるとボリボリと音が鳴るのは『せんべい』と言つて、この透き通つた緑色の液体は『お茶』と言つのですか。とてもおいしいです。」

シックリせんべいを食べ始める。と同時に、彼女は再びせんべいを食べ始めた。人の話ぐらに聞けよ……。

数分後

「それにしても似合わね~。」

空志は心の中で愚痴を零し、溜息をする。

それもそうだ、目の前のせんべいを食べ、お茶を啜る彼女の姿について説明すると、

- ・見た目：小学五～六年生
 - ・髪：銀色
 - ・目の色：紫色
 - ・格好：魔法使いスタイル？
 - ・結論：……そりゃあ似合つはずもないか。
- おつと、こんな事を考えていても話が進まない、彼女について聞くことはまだまだ沢山あるのに。
- 「フェルちゃん。食べる途中悪いんだけど、少し質問してもいいかな？」

「はい、どうぞ。」

「出身は？」

「アナスタシア国です。」

「……出身は？」

「アナスタシア国です。一度も言わせないでください、記憶力が

ないですか？」

「へー、アナ斯塔シア国つて言つんだ。じゃあ年齢は？」

「女性に年齢を聞くのは大変に失礼な事ですがいいでしょ、年齢は二十五です。」

「ゴン！！！額が机に直撃し鈍い音が鳴る。その姿で二十五つとかしいだろ・・・。」

「どうしたのタカシ？」

「いや、なんでもないよ。最後の質問、職業は？」

「魔法使い。」

その言葉を聞くと僕は無言で立ち上がり居間を後にし、階段を上

り、自分の部屋に入り、ベッドへと倒れ込む。

「拝啓お父さんお母さん。家に自称魔女の不法侵入者がきました。一体どうすればいいでしょうか。」

「とりあえず寝よう、お風呂は・・・明日の朝シャワーでいいか。」

「うづくと空虚は現実逃避をするために深い眠りにつくことになりました。」

一話・帰つてきたら届たのですが。（後書き）

初めて長編を書かせて頂きます。まだまだ至らないうといふもあると
思いますが、応援の程よろしくお願いします。

一話・親が帰ってきたのですが。

時間とこゝものは無慈悲なもので、どんなに現実逃避しようとも結局は朝が来る。

「はあー。」

昨夜の事を思い出し思わずため息が出る。
出来れば夢であつてほしい。そう思にながらシャワーを浴び居間へ行くことにする。

「やつぱりいるか・・・。」

いた、いたよ。彼女は器用に座布団を枕にしてスヤスヤと寝ていた。何とも無邪気な寝顔の事か、とても二十五歳?とは思えない。とは言つても見た目は十一歳くらいなのだが・・・。

そんな事を考えていると

「・・・・・ん・・・。」

おつと、田を覚ましそうだ。彼女は若干寝ぼけながら机に向かう姿を確認する。

「ふあ、おはようございましゅ。」

・・・田律が回つていなか上手く話せていない。

「フルさんおはようございます、取り敢えずこれでも飲んで田を見ましてください。」

そう言つてお茶を出す。

彼女はお茶を飲み終えると顔を俯かせ、暫く沈黙する。
時間にして三十秒位たつた後こちらを見つめる。

「改めて、おはようタカシ。それと聞きたい事があるのだけど時間は大丈夫かしら?」

「う・・うん。そうだその前にシャワーでも浴びたらどうかな?」

どこか嫌な予感がしたので話題を変えることにする。どちらにせよ後で追及されることは変わらないのだが、それでも幾らか考え

る時間は稼ぐことが出来るだろ？。

彼女がシャワーを浴びている間に昨日の事について改めて考えてみる。

名前はフェイメール・アンジェリーナ・マスコットティア、年齢は二十五歳、出身国はアナスタシア国、職業魔法使い。

……どこのゲームキャラだよ。名前はともかく何だよアナスタシア国つて。俺の知る中でこの地球上にそんな国無かつた筈だ。新しくどこかの国から独立でもしたのか？でもそんな事が実際あったとしてもニュースになる筈だしテレビで報道されるに違いない。いや待て、その前に最も重要な疑問がなかつたつけ。彼女のビックリプロフィールに動搖しすぎて忘れてしまっていたかも知れない。

……あ、彼女どうやって家に入ったのか聞いてないや。

「…………わすれてた…………」
僕、昨日に続いてこんなに叫んでるけど近所迷惑になつてないかな……まあどうでもいいか。

「タカシ、一体どうしたの！？」

浴室から俺の絶叫を聞いたフェルさんが駆け付けたようだ。
俺はフェルさんの姿を見ると彼女の肩をガシッと掴み

「フェルさん！」

「な……何かしら？」

「あなたに聞きたい事があります！」

「は……はい。」

「フェルさん！貴女どうやって僕の家に入つて來たのですか？」

何とか聞いたかったことを聞け、そして先程思いつ切り叫んだので息を切らしていたところ

ピーンポーン、ガチャツ

「たかしー、元氣にしてたかあ！？」

「たかちやーん、一人で寂しくなかつ・・・。」

両親が帰つてきました。彼らの語尾が上がつてしまつたり途中で途切れてしまうのも無理ないでしょう。客観的に現在の僕たちの様子を見ると

凄い剣幕な表情をした男がバスタオル一枚の幼女の肩を押さえ息を切らしている。

不味い、何とかこの状況を打破しなければ僕の立場やら何やらが色々とアレだ。

「父さん母さん取り敢えずお帰りなさい！今こんな状況になつてるのは僕が決してアレな性癖なわけじゃなくて・・・取り敢えずこつちでじつくり話し合いましょう！」

僕が突然帰つてきた両親に必死の言い訳をしているが、彼らはどうやら僕ではなく僕の目の前にいる彼女を見ているようだ。そして

「ケイスケ、ハルカ、お邪魔しているわ。」

「ありや、フェルさんじやねーか。」

「あらフェルちゃん、いらっしゃい。」

・・・へ？

一話・親が帰ってきたのですが。（後書き）

一話目です。おそらく次の話で両親とフェルさんとの関係、フェルさんが何者なのかが分かるのではないでしょつか。感想・ご意見など頂けると作者は感激です。

「話・説明してもらひたのですが。

「わて、とりあえずビーから説明してもらいましょうかね。」

現在僕たちは居間のテーブルに僕・フルさん、向かい合つて父さん・母さんと座つている。

蛇足だが今フルさんはあれ以外に服を持つていなかつた為に母さんのお下がりを着てゐる。

「ではまずはフルさん。」

「なにかしら?」

「さつきの質問について答えて貰えますか?」

「さつきの質問と言つと、家が閉まつていたのこぢりやつて入つてきたか、でいいのかしら。」

「はい、そうです。」

「そんなのこの家のこの居間の座標に合わせて『転移』してきたからに決まつてゐるじやない。」

今度は『転移』ときたか・・・。

「そうですか。」

僕は半ば諦めた風に答える。昨日は認めるのが嫌になり現実逃避で寝る、といつ手段をとつたが、もう認めなければいけないのかもしない。この世界とはまた異なつた、異世界がある事。そしてこの世では古くには使われてはいたかもしないが、今ではもはやSF小説とかでしか言葉も出てこない『魔法』という存在を・・・。とりあえず今は質問を続けることにする。

「じゃあ一つ。父さん、母さん。」

「なんだ?」

「なに、たかちゃん?」

「フルさんとの関係は?と言つて海外出張中じゃなかつたの?」「フルちゃんとはお友達よ~。」

と母さん。

「まだ出張中だが。」

と父さん。

「ええ、一人とは交友関係にあるわ。」

とフェルさん。

「…………いやお友達つて、フェルさんは異世界から來た人でしょ？」

何か嫌な気がするがこれは聞かなければならぬ事であると思い、意を決して聞くことにする。

「ああ、その事か。それはだな、俺はお前くらいの時に何の事故か知らんが異世界に転移してしまー・・・。」

「私は異世界出身の人間なのよ。ちなみに海外出張の出張先は私の故郷でもありフェルちゃんの出身国でもあるアナスタシア国よ。衝撃の事実、父さんは異世界に飛ばされてそこでお母さんに会つて結婚したと言つ。父さん、あなたはどこぞのRPGの主人公か何かですか・・・。というか出張先が異世界つて、それは海外出張じやなくて界外出張なんじや。あ、僕の漢字の変換ミスか。まあ異世界なんてファンタジーな存在、普通の人には分からぬだろつし。・・・もう考えるのが面倒になりつつある自分です。今なら何でも受け入れられる自信がある・・・かも！」

「あれ？ そういえばたかちゃん。」

「ん、何？ 母さん。」

「そう言えば学校は行かなくていいの？ もつこんな時間だけど・・・。」

母さんにそう言われ時計を見る。・・・現在午前八時五十分。ホームルームも終わり一時間目が始まるまで後十分といつたところだろう。

前言撤回、やつぱり受け入れたくない事実もあります。

「学校・・・休むか？ お前も俺たちに聞きたい事とか色々あるだろうし。」

そう優しくフォローしてくれる父さん。優しさが胸に沁みわたり

ます。

「……うん、そうする。とりあえず学校に連絡していく。」
もう学校に行く気力なんて残つていませんよ……。

学校にも無事？に連絡し終わり、再び居間へと戻る。

「おかえりなさい、タカシ。」

「ただいまフェルさん。……あれ、父さんと母さんは？」

「二人ならアナスタシア国に戻ったわよ』フェルちゃん後の事は
よろしく~。』って、まあ別にいいけれど。」

『あいつ等次に会つたときは只じゃ済まない』と小声に聞こえたのはきっと空耳だらう、そう言う事にしておきたい。

「……で、タカシ。朝の続きをなのだけど……。」

「そうだフェルさん！僕もつとフェルさんの事とかそつちの世界の事について聞きたいな！」

僕のターンはまだ終了……以下略。その話題については触れさせてはいけない気がするんだ。

「話題を変えようとしても無駄よ。タカシ、どうしてあなたは昨日私の話を無視してこの部屋から出て行つたのかしら？」

フェルさん、見た目幼女なのに笑顔がとても素敵で……怖い！

「いや、ほら、あの、誰しも認めたくない物つてあるじゃないですか。」

「ええ、あるかもしだなわね。……で、理由はそれだけなの？」

「はい！それだけです！すいませんでした！」

「なんか凄く潔いわね……まあいいわ。突然この家に来た私にも非はあるのだし。」

「あつ！そうだフェルさん。」

「何かしら？」

何だかんだ言って之を聞くなくちゃ何も始まらない気がする。

「何でこの家に転移してきたの？」

そう尋ねるとフルさんは今まで見た一番綺麗（敢えて可愛いとは言わない、だって怒られそうだし。）な笑顔でこう言った。

「それはね、働くのが嫌になったからよ。だって働くの疲れるんだもの。これからお世話になるわ。一人にも許可は取つてあるから安心して。ああそうだ、まだ朝食を食べていなかつたわ。タカシ早く朝食の用意を・・・。」

・・・どうやら家に一ートな魔法使いがやつてきたようです。

二話・説明してもらひたのですが。（後書き）

ようやく居候生活がはじまります。それにしてもフヨルさんのキャラが安定しませんね・・・。感想、意見などお待ちしております。

四話・居候生活が始まったのですが。

フェルさんが家に住み始めた次の週の土曜日。

「どうかな、家の生活には慣れただ？」

僕はご飯を食べる手を止めてフェルさんに尋ねてみる。現在は朝食の時間だ。

「ええ、まあ何とか。・・・でもまだ『これ』は駄目ね。」

そう言つて彼女は手に持つて『これ』、橋をまるで敵の様に睨んでいる。

・・・それにしてもあの時はすこかつたなあ。

フェルさんが正式に家に住むことになった（とは言つても、ただ前日は自分が勝手に現実逃避で布団に潜り込んだだけの）その日の夜。

「フェルさん。そろそろ夕食にしようと思つんだけど、何か食べたいものはある？」

異世界の食文化について全く知らないので、取り敢えず聞いてみることにする。

「いえ、特には無いわ。タカシに任せます。」

任せるとか・・・さて何にするか。

そう言つて冷蔵庫を開けて中を確認する。

「この材料は・・・和食メインだな。」

じつして作った料理は

・ご飯

・味噌汁（ワカメと豆腐）

・鯵の塩焼き

・キヤベツと大根のサラダ

まあ、これでいいかな。

じつして夕食の準備も終わり、料理もテーブルに並び終える。

「よし、じゃあ食べようか。頂きます……。」

「タカシ。ちょっとといいかしら?」

頂きますと言いついたのだが、途中でフェルさんに呼び止められる。

「あれ、何か問題でもあつた?」

やつぱり並べられた料理についてだらうか、恐らくどれも口にした事の無い物ばかりなのだろう。

「料理の方は、まあこちらと向こうでは文化の違いもあるかもしませんし、予想はしていたのですが・・・、ナイフとフォークとスプーンも無しにどうやって料理を食べるのですか?」

「へ?」

何か僕の予想とは違う質問が来たぞ。

「いや、だからナイフとフォークもとスプーンも無しにどうやって料理を食べればいいのですか?」

「いや、箸ならそこにあるじゃないか。」

「・・・箸? これの事。」

そう言つてフェルさんは箸を・・・両手で一本ずつ取つた!?

「まさかあなたの国ではこれがナイフなどの代わりを・・・。随分と変わっていますね。」

フェルさん、顔が引きつりますよ。もしかして、箸を知らないのだろうか。

「いいですかフェルさん、これは箸といつて僕の国ではこれが料理を食べるための道具となつています。もちろん僕の国でもフォークやナイフなども使いますが、このような料理の場合は主にこの箸を使います。」

「へえ、そうなの。」

彼女はそういうと、再びナイフとフォークの要領で鰯の塩焼きに刃?を、つてだから

「そういう風に使う物じゃない!...」

「な・・・何!?」

もう駄目だ、これは夕飯を食べている場合じゃない。

「分かりました。フェルさん！」

「は、はい！」

「これから箸の使い方を教えます！」

如月空志の箸講座

「では、フェルさん。これから箸の使い方を教えます。」

「ええ、よろしくお願ひします。」

「まずは箸の歴史から。」

「タカシ、それは箸を使うのにあたつて必要な事なのかしら?」

「・・・では先ずは箸の持ち方から説明します！」

一・箸の片方を親指の根元に挟みます。

二・薬指を軽く曲げ、第一関節の上にして親指と薬指で支えます。この箸を『固定箸』といいます。

三・もう一つの箸は親指の腹で挟み、中指の第一関節で支えます。こっちの箸は『作用箸』といいます。

四・作用箸の支えをしつかりさせるために小指を薬指に添わせます。じゃあフェルさん、やってみて。」

「わかったわ。えっと、こっちの箸を挟んで・曲げて・支えて、もう一本の箸を挟んで・支えて・添わせる。・・・こんな感じかしら?」

そう言つてフェルさんはちよつぴりじ機嫌な様子で僕に箸を見せる。何だか子供に箸を教える気分だな、本当は僕より年上の箸なんだけど・・・とは言つても見た目が見た目だからなあ。

「・・・何か変な事考えてないかしら?」

何だと、僕の考えている事が分かるのか!?

「顔に出てるわ、『変な事考えてます』ってね。」

「別に変な事なんて考えて無いですよ。ただ年上の人には箸の持ち方を教えている筈なのに子供に箸の持ち方をおしえ・・・いたつ、ちょ、本当に痛いんですって・・・すいませんでした――つ――」

箸の先端で容赦なく突いてくるフェルさん。「これはなかなかつて新しい箸の使い方を考えてしまった様です。

「いたたたた。容赦ないな。じゃあ次に箸の使い方にについて・・・はもう新しい使い方を考えてしまったようだし・・・。いえ、ちやんと教えますよ！」

フェルさんの目が本気だったのでもうボケるのは止めにします。

「では箸の使い方について。

上の箸を下の箸から離し、人差し指と中指を動かして作用箸を上下に動かします。一本の箸を両方動かさず『下の箸をしっかりと固定し、上の箸を動かす』これを意識してやってみて下さい。」

そう言われ、やつてみるフェルさん。がどこか動きがぎこちない。

「これは・・・難しいわね。」

「まあ焦らずにゆっくりやつて行きましょ。」

「そうね、そうするわ。・・・それにしてもタカシ、あなた人に説明するのが上手ね。」

「ええ、まあ『これ』見てましたから」

そういうて手に持つていた『スマートフォン』を見せる。

「確かにそれ、ケイスケが言つてた『カソニーニング』つてやつじやないの？」

「いえ、別にテストをしている訳じゃないですし。」

「それもそうね。」

そして同時に笑い合つ。・・・が。

「説明している内に料理が冷めちまつたじゃね——か——今頃思い出した僕であった。

「そんなことがあつたわね。」

「いや、あつたわね~つて一週間前の話だけど・・・。」

「別にいいじゃない。でどうかしら今の私は?」

田の前にはまだ少しづきにちないが箸を使ってご飯を食べるフェルさん。

「うん、前よりも箸の使い方上手くなつたと思つよ。」

「そう、ありがとう。」

そう言つてフェルさんは優しく微笑んだ。

四話・居候生活が始まったのですが。（後書き）

四話目です。フェルさんの世界には和食が無かつたようですね。箸の持ち方、使い方については「和食普及委員会・お箸が正しく持てますか？（<http://www.wasyokuden.com/cstick/index.html>）」を参考にさせていただきました。感想、ご意見などお待ちしております。

第五話・フェルさんの一日に関するのですが

フェルさんとの生活が始まり早一ヶ月。彼女もここでの生活に慣れたみたいで・・・、

パリツ、ズズーーツ。

と寝つころがりながらせんべいを食べ、お茶を啜り、そしてテレビを見ています。まあ、もう随分と寛いでますね。そんな彼女を見ていて、ふと思つたことがある。・・・フェルさんって普段どんな事をして一日を過ごしているのだろうか。

「ねえフェルさん？」

「何かしら？」

「フェルさんって、いつも何して過ごしてるので？」

「死になさい。」

「・・・え？」

「あら御免なさい、つい本音が・・・じゃなくて口が滑つてしまつたわ。駄目よタカシ、女性のプライベートを無闇に聞いては。」

「はあ、すいません。」

「気を付けないと駄目よ。そうでないと何時か勢い余つて『ハア、ハア、フェルさんのパンツ、今日、何色?』って言つてしまふかもしないわ。」

「言わないよ絶対そんな事!?」と言つたが洗濯物すべて僕に押し付けている人が何を言つたか。」

「・・・はつ!まさか。タカシあなた『わーいフェルさんのパンツ、クンカクンカしちゃうお』みたいな事を、なんてエッチな人なの。」

何かもう疲れたんでスルーしていいですかね?」

「まあ冗談はいいまでにして。いいわ、タカシには教えてあげま
しょう。」

ここからはフェルさん視点

はい、どうも。フェイメール・アンジェリーナ・マスコッティアよ。タカシが私の生活が知りたいようなので紹介するわ。・・・とは言つても何だか面倒ね。まあ適当にこんな感じでいいかしらね。

○月?
日

○月 日 タカシが学校へ行つた。取り敢えず帰つてくるまで寝ておく。

車に車椅子に乗るのか想像が湧かない。何が何が

「タカシ、体どうしたの。何か不満でも？」

いや、不満しかないから！何なの『カユ・・・ウ』つて。

け?

「？」

「私の場合、ゾンビを倒す方だから。私にかかれば杖の一振りで

「アスコニーって、そういう事を言つてるんじやなくて。」

「なくて？」

「僕はちゃんとフールさんの事が知りたいんです……って僕は何を言っているんだ―――！」

「ええ、分かっわ。タカシの誠意に答えてちゃんと教えるわ。・・・タカシって大胆ね。」

では改めて、フハイメ（ry。何だか名前いつの疲れたわ。それに何だかインパクトが足りないわ。今度から自己紹介するときは「はーい！皆さんこんにちはーー皆のアイドルフェルちゃんだよー」とでもしようか・・・。タカシ、そのこの世の終わりを見ているかのような目は何かしら？まあいいわ。後で拷も・・お仕置きね。それは兎も角、まずは私の一日でも紹介しましょう。

フールさんの一日

AM06:30 タカシに起こされ起床。

AM07:00 シャワーを浴びた後、朝食

AM07:40 朝食終了、タカシは学校へ行く。

AM07:50 二度寝開始。

AM11:00 一度寝から目が覚める。テレビを見る（せんべいとお茶は必須）。

PM12:00 昼食（タカシが朝食と一緒に用意しておいた）。

PM13:00 朝食終了、食休み。

PM14:00 散歩に出かける。「お婆ちゃん、おかしー！」

PM16:00 散歩から帰つてくる。お昼寝。この後16:30位にタカシが帰宅。

PM17:00 お昼寝から目が覚める。読書。

PM19:00 夕食。夕食後まつたつとテレビを観たりタカシとお話とかして過ごす。

PM21:00 入浴。大体一時間位。
PM22:30 就寝。

だいたいこんな感じね。

フェルさん視点終了

これを見て僕は啞然とした。だって・・・、「・・・何かもうあれだね、食べるか寝るかテレビ観るしかしてないね。」

そう言つと、フェルさんはもう素敵な笑顔で「何か文句でもあるのかしら?」

と返してきた。この笑顔の前には何も言えないけど、フェルさん二十五歳だよね、働き盛りの人がこんな生活つてビックリ、もつあの一言に尽きるしかないじゃないか。

「・・・」

「・・・ん、何か言つた?」

「いや、何でも無いよ。」

危ない、聞かれるところだった。まあフェルさん二ートなんて言葉知らないと思うけど。

「ねえフェルさん。」

「何?タカシ。」

「ここでの生活、楽しい?」

「そうねえ・・・。」

静かに目を閉じ考え込むフェルさん。そして、

「ええ、とても。タカシは、どう?」

僕は・・・。

「まあ、退屈はしないな。」

取り敢えず今はそつ答えることにした。

第五話・フェルちゃんの一日(後書き)

東雲：「なあフェルさん。『お婆ちゃんおかしー』って何だ？」

フェル：「いや、外を歩いてい居ると道すがら『お嬢ちゃん、お菓子たべるかえ？』って何か渡されるのよ。」

東雲：「まあその口りな容姿じゃ無理も・・・『逝きなわー』・・・ウボベラアツ！」

東雲は になりましたとや。

感想ご意見など、どうぞお待ちしております。

第六話・ちよつと誤魔化したのですが・・・。

授業も無事に終わり、帰宅。

— ただいま —

家に帰った時のお決まりの挨拶。約一ヶ月前までは誰も返してはくれなかつたが、今は違う。今は同居人であるフェルさんが居間の方から・・・。

お帰りなさい、夕カシ。

そう決して玄関の前で正座して待つては居間の方から。

「どうしたのタカシ？ ありえない物を見るような目で私を見て。ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない。」 フェルさんと言えば一日中居間で煎餅食べてお茶を飲んでいる様な人だぞ。と言う事は。

あなたは「二さん」が魔法で作った幻景で、それ
は、こんなにもまつべが・・・・ふにふにしてるー?」

それにふにふにしてしまひたて本物たるもの

さてどうした物でしょ。か、フエ川山とい、火山かも少しで噴火してしまいそうです。ですがこれを鎮める方法を私は知つています。それは。

—すいません—
—した—

はい、土下座です。まあこれくらいなら純粹な唯の土下座で十分でしょう。私の土下座はあと3パターンありますよ。

「・・・まあいいでしょう。私の日頃の生活からして貴方が驚愕するのも無理ないです。」

「まあどうも、それでこんなとこまで正座までして僕の事を待つ
てどうしたんですか？」

「そうよー忘れていたわ。タカシに聞きたい事があるの。」「ああ、そりなんですか。」

「アーティスの手。」

「じゃあどうあえず居間に行きませんか?」

ମହାକାବ୍ୟା

一
霧
阱
氣
的
了
？

と言つ事で居間へ移動。

「それで、僕に聞きたい事つて何?」

「じゃあ、聞くわ。タカシ、あなたが昨日言つていた『一ノト』の意味なんか教えてくれないか？」

・・・どうやら僕が小声で言つていたのが聞こえてしまつたよう

「ええ、聞けえちゃいました。」

せじ、困りました。どう説明したものでしょうか。本当の事を言つたら、せつと・・・しなくても怒るでしょうね。考への空志、相手を怒らせず、それとなく持ち上げるよ」・・・。

空志の頭の中

空志A「これより緊急会議を開く。議題は『フルさん』にて」

に「こうべのよみに教えたらよいか』である。」

卷之三

(以降空志A・B・C・DはA・B・C・Dと略します。)

A 「ではBよ、君は何かどのように考へてゐるかね。」

B へい、私は『一』と別名由宅敬備員と呼ばれており、家

えて、小走す。

「素晴らしい！」

「ああ、さすが我らが円卓を支えるブレーンだ。」

A 「うむ、さすがだBよ。」

B 「ありがとうございます。」

C 「ですが、もし二ートの本当の意味を彼女が知つてしまつた場合はどうこますか?」

A・B・D 「・・・。」

A 「Dよ、何か良い意見はないか?」

D 「私ですか。そうですね・・・、まあ無難に土下座Ver.?

でもすれば良いんじゃないでしようか。」

A・B・C 「「それだ!」」

A 「よし、意見も出そつたといひで、会議を終わりにしたいと思つ。皆の者い苦労であつた。」

B・C・D 「「お疲れ様でした!」」

空志視点

「・・・はつ、僕は一体・・・。」

「じうしたのタカシ。」

「いや、何でも無いよ。」

何、だつたんだ今のは、頭の中で四人の僕が話しあつて いたよ うな
・
・
・
・

「それでタカシ。二ートつて何?」

「それは・・・。」

どう説明したものか考えようとしたとき、僕の頭には何故かフェルさんの質問に対する答えとその後の対処法まで導き出されていた。
「ええと。フェルさん、二ートと言つのはね、『二ートとは別名自宅警備員と呼ばれており、家を守る番人のよつな人』という意味なんだ。」

「・・・。」

「どうしたのフェルさん?」

「・・・素晴らしいわ!二ート、何と素敵な響きなのでしょうか。」

「

あれ、何か可笑しな方向に進んでしまったような。

「そうだわ、この事をケイスケとハルカに連絡しましょう。」

「・・・え？ ちょ！ まつ！」

フェルさんを止めるも失敗。僕はどうなるのでしょうか・・・。

フェル視点

「ケイスケ、ハルカ！」

「おお、フェルじゃねーか。」

「あらフェルちゃん、お久しぶりね。」

私は通信魔法♪「**コンタクト**♪」を使い「人に話しかける。

「どうしたのフェルちゃん。随分どこ機嫌だけど、何か良いことでもあつたのかしら？」

「ええ、そうよ。それで一人にも聞いてもらいたかったの。」

「どうか。それで何だ、良いことってのは？」

「あのね、二人とも。私、タカシにニートって言われたわ！」

「「「・・・・はあ！？」」

慶介視点

何か今、とても可笑しな言葉を聞いたするんだが。フェルのやつ『ニート』って言ってなかつたか？『ニート』って『N E E T』だよな、あの働くかずにだらだらと家なんかで過ごしている人を指す言葉だよな。何でフェルはそんな事を言われて嬉しそうにしているんだ。ほら見る。あまりに素つ頓狂な事を言われて隣にいる我が愛しの遙がポカーンとしちまつてるじやねーか。ああ、それにしても何でこんなにも遙は可愛くて美しいんだ。遙ちゃんマジ天使！

おつと、あまりに遙が天使過ぎて思考がが変な方に進んじまいそうだった。んで、何でフェルがあんなにもニートと言われて嬉しそ

うなんだ?と言ふ事だつたな。まあタカシが何か色々と捻りに捻つた意味で二ートについて説明したに決まつていい。

「それでフェルよ。二ートの意味は知つていてそれを言つてはいるのか?」

「ええ、タカシが『二ートとは別名自宅警備員と呼ばれており、家を守る番人のような人』って言つていたわ。」

・・・はあ。流石俺の息子。強ち間違つていないとこりが何とも言えない。

「あのは、フェル。二ートって言つのはな・・・。」

空志視点

フェルさんが僕の両親に報告すると言つて早三十分以上が経過した。

ス――――。

後ろから襖が開けられる音がする。

「あ、フェルさん話おわ・・・。」

パンツ!!

突然襖の辺りから乾いた音がし、そこから痛みが来る。

ああ、僕類を叩かれたんだ。

叩いた本人を見る。・・・フェルさんだ。何だかとても悲しい顔をしている。

「タカシ。私ね、嫌いな人がいるの。それはね・・・。」

・・・・・嘘をつく人なの。

そう言つとフェルさんは自室へ戻つて行つた。
僕はただ、叩かれた頬を押さえている事しか出来なかつた。

あれ、これってバッドエンドっ？

第六話・ひょっと誤魔化したのですが・・・（後書き）

東雲：はいどうも。お待たせしました第六話です。

フェル：ええ、前の話から大体10日経つたわね。その間何をしていたの？

東雲：まあそれは活動報告に書いた通りですよ。ちょっとマンネリ状態から脱却するために・・・。

フェル：するためには？

東雲：・・・寝てますた、てへつ

フェル：てへつ つて可愛く言つても、全く可愛くないわよ。

東雲：酷い！・・・と言つた最後、空志に平手打ちとか酷くないですか？

フェル：いいえ、あればタカシが悪いの。

東雲：どうせ叩くなら俺にしてくれれば幾らでも！。

フェル：・・・キモイ。まあ幾ら此奴に言つても無駄だしこれで今回の話はお終いね。

感想：意見など、どんどんお待ちしております。頂けると作者は感激です。

東雲：待つて！せめて一発でも！

フェル：うわつ、来ないでつて言つてゐでしょ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1983y/>

家の居候はニートで魔法使い

2011年11月24日18時57分発行